光源氏を絶対化する四つの表現

吉村研一

はじめに

折口信夫は「反省の文学源氏物語」[注1]において、光源氏のことを以下のように論じている。

人によっては光源氏を非常に不道徳な人間だと言ふけれども、それは間違ひである。人間は常に神に近づかうとして、様々な修行の過程を踏んでゐるのであって、其のためには其過程々々が省みる毎に、あやまちと見られるのである。始めから完全な人間ならば、其生活に向上のきざみはないが、普通の人間は、過ちを犯した事に対して厳しく反省して、次第に立派な人格を築いて来るのである。光源氏にはいろんな失策があるけれども、常に神に近づかうとする心は失つてゐない。

さらに折口は、光源氏が妻・女三宮と柏木の密通という不幸な運命を経験しても「かうした運命に対して、絶対に能動の地位に立つ貴人、而も底知れぬ隠忍の激情に堪へてゐる巨人」[注2]と形容した。つまり光源氏はあくまでも人間であるが、「神に近づこうとした巨人」であると分析したのである。

これに対して高崎正秀は「源氏物語における伝承面の問題試論」[注3]において、「『物語』――それはもともと理想的な〈神の子〉の誕生・成長・結婚・偉業のあとを物語るものであつた」[注4]と定義し、『源氏物語』もこの考えを踏襲したもので、光源氏こそ「神の子」であると位置付けた。同論文はその根拠として、光源氏の悪徳悪行（藤壺冷泉院の問題、空蟬[注5]、朧月夜との関係、養女玉葛や秋好姫への恋情など）は数限りもなく、真に醜態醜悪の連続というより外はないが、しかも自らの不倫に対する反省もないのは、光君の絶対性ということが考えられねばならぬと言及する。「〈神の子〉は『神ながら神さびせす』―略して『神ながら』と言へば一切が、不倫も不徳も解消して了ふのである」と説いている。もともと高崎は早く一九五〇年代に光源氏の神の子論を打ち出し、「『神の子』の行為を叙述するものが『物語』なるが故―すべてが許容され、一条天皇も賞賛さ

れ、御堂道長も之を愛読して怪しまなかったのであります」[注6]と言及し、「神の子はその成長のために禊をしなければならぬ。光源氏の須磨行は禊である」[注7]と分析し、光源氏の死が描かれていない理由も、神には『死』といふものはなく、それゆえ雲隠巻の本文空白の意義を強調した[注8]。

さて、折口にしても高崎にしても、それが神に近い巨人であるか、神の子そのものであるかの違いはあるものの、光源氏を通常の人間とは次元の異なる特別な存在と絶対化して、その理由を光源氏の「行動」や「考え方」に基づくものと分析した。つまりこのような非常識で非人間的な「行動」や「考え方」ができるのは、神か巨人以外あり得ないというのがその根拠である。

本稿はこのように光源氏が特異な存在であるならば、彼を描写・表現する「言葉」からもそのような絶対性が窺えないかという観点に立って、そのアプローチを試みた。つまり、光源氏と他の登場人物との表現の差異性、もしくは源氏以前のかな文学における表現との差異性が、物語で使用される「言葉」によって論じることができないかを考察したものである。

一　『源氏物語』における特殊な「言葉」

『源氏物語』における自立語の語彙数（ことなり語数）は、宮島達夫『古典対照語い表』[注9]によると約一一四〇〇語が数えられる。このうち名詞が約四八〇〇語を占めるが、名詞を除いた約六六〇〇語を対象にして、源氏以前の主要かな文学作品には使用例が見い出せず、『源氏物語』において初出と考えられる語彙を抽出してみると約二九〇〇語に上った[注10]。名詞は人名・地名など、物語固有の語彙が多く、これらは必然的に初出になるので対象外とした。ここでいう源氏以前の主要かな文学作品とは時代順に、『古事記』、『万葉集』、『古今和歌集』、『竹取物語』、『伊勢物語』、『土佐日記』、『後撰和歌集』、『大和物語』、『平中物語』、『蜻蛉日記』、『うつほ物語』、『落窪物語』、『枕草子』を指す。

さて、この二九〇〇語という初出語を以下のように大きく三つに分類する。

A　複合語

実は初出語の大半の約二七〇〇語が複数の単語を結びつけることによって仕立て上げられた複合語であって、個々の単語は『源氏物語』以前に使用例があるものがほとんどであった。たとえば「おもひ・あかし・くらす」、「しのび・ありく」、「おほやけ・はらだたし」などの、動詞、名詞、形容詞を複合させたもの。あるいは「うち・うなづく」、「もの・しづかなり」など接頭語と複合させたもの。または「めざまし・がる」、「いそがし・げ・なり」など接尾語と複合させて品詞を変換させたものなどである。この類の語彙には「ねん（念）・ず」、「かうざく（警策）・なり」など、漢語に「サ変動詞」や「なり」を付着させて和語に仕立て上げたものも多く見られる。これらの初出語は確かに一般的に遍く使用されている単語が結び合わされて生み出されたものではあるが、その組み合わせ方によって特殊

な響きをもたらす効果がある。

B　畳語[注11]

「いまいまし（忌忌）」、「げすげすし（下種下種）」など、同一の単語が反覆された言葉で、初出語としては九〇語ほど数えられる。初出語に限らない畳語全体では二四〇語を超える数が認められ、本物語が強調の修辞法として畳語を好んだことが窺える。「忌む」にしても「下種」にしても、遍く使用されていた言葉ではあるが、反覆させることによって、独特の味わいがもたらされるのである。

C　複合語でも畳語でもないもの

AやBとは異なり、いわゆる純粋な初出語ともいうべき言葉で一〇〇語ほど数えられる。物語の享受者にとっては耳慣れない言葉だと思われたはずである。享受者に違和感を与えることが目的とも考えられ、特別の思惑を持って使われた可能性が強い。用例数の多い順にベストテンを挙げる。

①「かかづらふ（拘）」三〇例　②「むつぶ（睦）」二四例　③「かすむ（諷）」二二例　④「あえかなり」一七例　⑤「よそほし（装）」一二例　⑥「あまゆ（甘）」一〇例　⑦「いつかし（斎）」七例　⑦「はぶく（省）」七例　⑦「をさまる（治）」七例　⑦「いどまし（挑）七例　⑦「をんなし（女）」七例

本論ではこれら複合語、畳語、どちらでもない語からそれぞれ一つずつ、さらに言い回し表現から一つを付け加えて四表現に注目し、それらの表現と光源氏絶対性との関わりを考察した。

二　「いつかし」に込められた意味

まずCに挙げたベストテンのうち、特に光源氏と関わりの強い語として、「いつかし」という言葉が浮かび上がる。その使用例七例を以下に列挙する。（本稿の『源氏物語』引用本文はすべて『新日本文学大系』岩波書店）また、「いつかし」に校異のあるものは『源氏物語大成』より抜き出した。なお諸本の記号は大成に従った。

1院（朱雀院）にも、かの下り給し大極殿のいつかしかりし儀式に、ゆゝしきまで見え給し（秋好中宮ノ）御かたちを忘れがたうおぼしをきければ、（②澪標　一二四）

【校異】たたはしくかうかうしかりし（河・全）

2いにしへの例になずらへて、白馬ひき、節会の日、内の儀式をうつして、むかしのためしよりもこと添へて、いつかしき御ありさまなり。（②少女　三一七）

【校異】はつかしき（青・平）　いかめしき（別・讃）

3右近「（前略）いまは天の下を御心にかけ給へる大臣にて、いかばかりいつかしき御中に、御方しも、受領の妻にて、品定まりておはしまさむよ」（②玉鬘　三五〇）

【校異】はつかしき（河・全）

4源氏のおとゞの御顔ざまは、（冷泉帝ト）こと物とも見え給はぬを、思ひなしのいますこしいつかしう、かたじけなくめでたきなり。（③行幸　五九）

【校異】いつくしう（青・横池肖　河・全　別・保麥）

5内大臣「いかにさびしげにて（源氏ノ）いつかしき御さまを待ちうけきこえ給らむ。御前どももてはやし、御座ひきつくろふ人も、はかゞしうあらじかし。（後略）」

（③行幸　六八）

【校異】いつくしき（青・御横池三大　河・大　別・麥）

6おとこ君（夕霧）は、夢かとおぼえ給にも、わが身いとゞいつかしうぞおぼえ給けんかし。

（③藤裏葉　一八三）

【校異】はつかしうそ（河・七宮尾青平鳳　はつかしくそ（別・陽國）

7（源氏ヲ）見たてまつる人も、さばかりいつかしき御身をと、ものの心知らぬ下種さへ泣かぬなかりけり。

（④御法　一七五）

【校異】いつくしき（別・保麥阿）

「いつかし」について、小学館『日本国語大辞典』は、「（『いつ（斎）く』の形容詞化したもの）大切に取り扱われるさま。また、尊いさま。りっぱなさま。」としているが、この七例を分類すると、1、2が儀式の荘厳さ、3が血筋の良さを表現し、4～7が人の尊く立派なさまを表現している。

1秋好中宮が斎宮に下向する際の儀式の様子が「おごそかである」ことを意味している。

2光源氏が六条院で執り行った正月の儀式が「おごそかである」ことを意味している。

3右近の会話で、玉鬘が現内大臣（もとの頭中将）の娘であり、血筋が「とんでもなく高い」ことを意味しているが、右近としてはそれを強調して表現したかったので、あえて「いつかし」というそぐわない言葉を用いたとも考えられ、「いつかし」そのものの意味が歪められて使用された可能性がある。

4光源氏と冷泉帝がどちらも「尊く立派なさま」を意味していて、むしろ冷泉帝のほうが少し「いつかしさ」において勝っていると表現している。

5内大臣の会話で、光源氏の「尊く立派なさま」を意味している。

6夕霧がついに雲居雁と結婚できた自分のことを、「立派だ・たいしたものだ」と思っているだろうよと、語り手が推測している場面である。

7光源氏の「尊く立派な」姿を表現しているが、文脈としては、その姿が紫上の死に直面してうつろになってしまったことが語られている。

注目すべきは人のさまを表現した4～7の「いつかし」である。いずれも「尊く立派なさま」を表現しているが、表現される対象人物は三名、光源氏三例、冷泉帝一例、夕霧一例であり、光源氏とその血を分けた男君に限られている。ただし夕霧の例は語り手の推測であり、厳密に言えば光源氏と不義の息子冷泉帝のみとなる。言葉の意味から言えば、他の天皇や親王、続編の薫大将などに使用されてもおかしくはないのであるが、一切「いつかし」とは表現されないのである。そもそも「いつ

かし」は本編のみの使用に限られていて、光源氏死後の世界では全く用例がなく、「儀式がおごそかである」といった意味でも死後には用例がない。「いつかし」という言葉は光源氏の死をもってその役割を終えたかのような特殊な言葉なのである。

ここで校異を見てみよう。1の儀式のおごそかさを表現する「いつかし」については、河内本系はすべて「たたはしくかうかうしかりし」として、より具体的で分かりやすい表現に置き換えている。2についても「はつかしき」、「いかめしき」という異同があり、これらは儀式の荘厳さを描写するのに「いつかし」という言葉が分かりにくいことを示すものではないか。また、3は河内本系がすべて「はつかしき」となっている。これもおそらく河内本が「いつかしき」御中という表現に違和感を抱き、「はつかしき」御中と表現するほうが血筋が極めて立派であることを的確に表すものと判断したためであろう。ただし、右近が玉鬘の血筋が素晴らしいことを、玉鬘の下女である三条に、「内大臣の娘ともあろう玉鬘が受領の妻なんかになってたまるものですか」と仰々しく血筋の良さを訴えたと考えれば、前述したように「いつかし」を用いることに納得がいくものである。4～7の人を表現する「いつかし」にも異同が多く見られる。これは人の有様と「いつかし」という言葉もしっくりと結びつかないことに起因しているのではないか。特に、4、5、7は「いつくし」とする本が多く見られることは注目すべきである。これは1字違いのこの言葉の方が人の有様を形容するのにより相応しく、分かりやすいと思われたからに違いない。[注12]

「いつくし」は小学館『日本国語大辞典』によると、「①神威が盛んであるさま。②威厳がある。③厳重である。④美麗である。⑤気立てが優しい。」となっていて、「いつかし」より、意味の広がりも大きく、『万葉集』、『うつほ物語』、『枕草子』などにも用例があり、「いつかし」のように希少な言葉ではない。『源氏物語』中に「いつくし」は一六例が使用されているが、そのうちの六例は全く異同がなく、残り一〇例も、「うつくし」、「たたはし」とするものが散見される程度で、逆に「いつかし」とするものは別本の陽明家本と保坂本にそれぞれ一例ずつしか見られない。繰り返しになるが、「いつかし」という言葉は『源氏物語』が享受されるにあたって、分かりにくい言葉であり、人の有様を表現するのにしっくりこない形容詞なのである。

ではなぜ光源氏と冷泉帝を「いつかし」と表現したのか。それは耳慣れない言葉を用いることによって、光源氏を特殊な存在に祭り上げたかったからではないのか。それを「神の子」と解釈するのか、「神に近い巨人」と解釈するのかはともかくも、少なくとも天皇すらも及ばない絶対的な存在に位置付けたかったことが窺えるのである。

三　「～顔（なり）」という表現

『源氏物語』における初出語は複合語が大半であることを述べたが、その中で特筆したいのが「～顔（なり）」という形容

動詞（一部名詞）である。初出語として異なり語数で五三例を数える。この「～顔」という複合表現は源氏以前にも「しらずがほ（不知顔）」、「おもひがほ（思顔）」、「したりがほ」など、『大和物語』、『うつほ物語』、『蜻蛉日記』、『枕草子』などに数例の用例があり、『源氏物語』が編み出した表現ではないが、新しい組み合わせを五三例も物語内に取り込んだことは驚かざるをえない。五三例の初出語の中には「おどろきがほ（驚顔）」や「うれへがほ（憂顔）」などのように、現代も使用されているような的を得た組み合わせの複合語もあるが、「いとひきこえがほ（厭聞顔）」、「うしろみがほ（後見顔）」、「おもひおよびがほ（思及顔）」、「すみつきがほ（住着顔）」、「なごりあり顔（名残有顔）」といった、いささか無理筋とも思われる複合語が多い。これらの中には当時の女房たちのいわゆる流行語の類もあったかもしれないが、ほとんどが『源氏物語』のために創作された特異な言葉であることは間違いないであろう。

その中でも注目したいのが、人間ではなく、自然や動物や植物が擬人化されて表現される「～顔」という言葉である。例えば「草むらの虫の声〳〵もよほし顔なるも」（①桐壺　一四）といった言い回しで、このような表現が『源氏物語』においては一七例もの用例があり、特別な役割を果たすために用いられたと考えられるのである。当時は、自然（動植物含む）にはすべて精霊が宿っているという考え方があり[注13]、自然に宿った精霊が、神と人間の間に入って、神の意志を人間社会に伝える「顔」として物語内で活用されたのではないかと考えたい。このような観点から分析すると、以下に示す光源氏に関連する用例を見過ごす訳にはいかない。

8青海波のかかやき出でたるさま、いと恐ろしきまでに見ゆ。かざしの紅葉いたう散りすきて、顔のにほひにけおされたる心地すれば、御前なる菊を折りて左大将さしかへたまふ。日暮れかゝるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、

（①紅葉賀　一四三）

この場面は、朱雀院の御賀で光源氏が頭中将と青海波を舞う場面である。光源氏の舞い姿のあまりの輝かしさ美しさに、天までも感応して時雨を降らせてきたというのである。この「見知り顔」というのは「理解している」、「認める」といった意味であるが、神が光源氏の美しさを認めていると解釈していいだろう。実はこの紅葉の賀が思い出される場面が第一部の末尾部分にもあり、ここでも天が感応している。

9あるじの院（源氏ハ）、菊をおらせ給て、青海波の折をおぼし出づ。（源氏ノ和歌）「色まさるまがきの菊もをりくに袖うちかけし秋を恋ふらし」。おとゞ（太政大臣）、そのおりはおなじ舞に立ち並びきこえ給ひしを、われも人にはすぐれたまへる身ながら、なをこの際はこよなかりけるほどおぼし知らる。しぐれ、おり知り顔なり。

（③藤裏葉　一九七）

光源氏が准太政天皇の地位に登った秋に、冷泉帝が朱雀院とともに六条院に行幸する。そのめでたい宴で童たちの舞う姿を

見て、光源氏、太政大臣（もとの頭中将）ともに、昔の自分たちを思い出す場面である。太政大臣が「自分が一番だと思っていたけれど、准太政天皇に登りつめた源氏の尊さにはかなうべくもないなあ」と納得したときに、時雨がおりを知っているかのように絶妙のタイミングで降り出すというものである。大団円を迎えた光源氏を祝福し、その尊さに神も感応するかのようである。また、これら以外でも、葵上の死に当たり憂鬱な光源氏に対して「おり知り顔なる時雨うちそゝきて」（①葵　三二二）とあって天が共感したり、伊勢に下向する六条御息所との別れに当たっての光源氏の乱れ心に「松虫の鳴きからしたる声も、おり知り顔なるを」（①賢木　三四六）と虫が共感したりする。これらはいずれも神が光源氏を特別の存在として認めていることを示唆するかのようである。このように光源氏の別格さを表現するに当たって、「神が光源氏に対して」とか、「天が光源氏を」のような直接的な表現ではなく、間接的でありながらも的確に言い表す方法として用いられたのが、このような自然を使った「～顔」なのだと分析いたしたい。なお人間以外に擬人化して用いられる「～顔」という表現は源氏以前に二例[注14]見つけることができるが、いずれもこのような示唆的意味には用いられていない。

四　「かろがろし」（母音交換形「かるがるし」含む）

本物語には一つの単語を反覆する形である畳語が多く、その用例は異なり語数で二四〇語を超え、そのうちの初出語は九〇語ほどあることを前述した。これら畳語の中で、初出ではないが、源氏以前のかな文学作品においては些少の用例しか見られない畳語で、物語内で多用されている言葉がある。「かろがろし」がその顕著な例で、源氏以前には『うつほ物語』と『枕草子』に一例ずつしか見出すことができないが、本物語においては七九例もの用例を数えている。

まず「かろがろし」の意味について考察する。「かろがろし」は、形容詞「かろし」を強調するために反覆させた形容詞であるが、そのもとになる「かろし」（「かるし」を含む）は本物語内で二三例の使用例があり、その意味内容は大きく分けて次の三つに分類できる。

① 物の価値が低い・人の身分が低い　一〇例
② 人の考えや行動が軽薄・軽率である　六例
③ 罪が軽い　七例

この「かろし」の意味分類を踏まえて、形容詞「かろがろし」七八例に名詞「かろがろしさ」二例を加えた八〇例を分類すると、

① 物の価値が低い・人の身分が低い　一四例
② 人の考えや行動が軽薄・軽率である　六四例
③ その他（不作法であること一例、安易であること一例）　二例

であり、「かろがろし」は「かろし」の用例のうち、②の「人の考えや行動が軽薄・軽率である」という意味を強調して表現することを主目的として用いられたことが分かる。ここに

は「罪が軽い」といったプラス面で使用される例もないし、「軽々しく持ち上げる」といった物理的な軽さを表す用例もない。「かろがろし」は、人間の軽薄さ軽率さを非難するために物語が大量に用いた言葉なのである。

以下に「かろがろし」が非難の意味で複数（二例以上）使用されている登場人物を多い順に示すが、光源氏に集中的に使用されていることに注目いたしたい。

光源氏　一五例
匂宮　四例
女三宮　四例
薫　三例
夕霧　三例
浮舟　三例
内大臣（もとの頭中将）二例
髭黒大将　二例
明石の君　二例
朝顔の姫君　二例
玉鬘　二例
髭黒の北の方　二例
落葉の宮　二例

おおむね身分の高い上級貴族以上の人物に用いられてはいるが、源氏以前の使用例二例を調べてみると、かたや天皇、かたや中宮という最高の身分の者が、その身分ゆえに軽率な行為であることが表現されている。『うつほ物語』では、「楼の上・下」巻で、今上帝が「かろがろしくなければ、自分で出かけて行ってでも俊蔭の娘の琴の音色を聴くべきであった」と言う場面。『枕草子』では、「関白殿、二月二十一日に、法興院の」段で、「中宮様が自分（清少納言）のような程度の低い者を御寵愛になれば、中宮という高貴な身分がら、かろがろしきことと世間からを非難されるだろう」と思う場面である。

これを踏まえると、『源氏物語』において、皇子とはいえ臣籍降下した「ただびと」光源氏の行動に一五例もの多くの「かろがろし」が用いられるのは、享受者にとって相当な違和感があったのではないだろうか。一五例のうち、大半である一三例が女との恋愛に関する問題について「かろがろしいこと」という意味合いで使用されていて、さらに、そのうちの七例が、女のもとへ通う行為に使われているが、これらの通いは、空蟬、夕顔、紫の上、末摘花など、光源氏がまだ冠位も高くない若き日の出来事でもあり、「かろがろし」という言葉は、『うつほ物語』、『枕草子』の用例と比較すると相応しい形容とはとうてい思われない。果たして、これらの女のもとへ通うことが天皇でもない「ただびと」の若者にとって、それほど軽薄、軽率な行為なのであろうか。当時の社会においてこのような女性との関係はそれほど理不尽なものではなかったはずである。

やはり物語は光源氏を「ただびと」とは異なる人物として描き出すために「かろがろし」を多用したのではないか。「かろがろし」を光源氏の行為にしつこいまでに繰り返し用いることによって、逆に「かろがろし」くない崇高な存在がどんどんと

強調されていくのである。また、物語中には、光源氏が自らの女通いを「かろがろし」と自己反省する場面も多い。光源氏自身にも自分が「ただびと」ではないという自覚があったことが読み取れるのである。

五　「涙落とす」

源氏以前のかな文学作品でも多くの用例はあるが、『源氏物語』において、こだわりを持って使用されている言い回しに「涙落とす」という表現がある。この他動詞表現は全一三例あるが、すべて自分以外の人に向けた「哀れみの涙」（五例）と「賞賛の涙」（八例）に限られている。一方、自動詞表現である「涙落つ」全一六例は、すべて自分自身の「悲しみ」と「感動」の涙を表現していて、この二つの表現ははっきりと外向きか内向きかで書き分けられている。

このような書き分けは源氏以前の主要かな文学作品には見られない。たとえば『うつほ物語』では「涙落とす」が一三例（「涙落とさぬなし」を除く）、「涙落つ」が一〇例あるが、それぞれ外向きの涙と内向きの涙が混在している。あの『伊勢物語』における東下りの有名な「かきつばた」のシーンで、むかし男が「からごろも」の歌を詠んだとき、[注15]「みな人、かれいひの上に涙おとしてほとびにけり」と他動詞表現が用いられているが、周囲の皆が泣いたのも、むかし男へ向けた「哀れみ」の涙というよりは、自分自身の内面の旅愁の涙であったに違いない。

さらに、『源氏物語』における「涙落とす」の用いられ方の特殊さは、「賞賛の涙」である八例のうち六例が、光源氏に向けられたものであるということだ。また、残る二例も夕霧と光源氏の孫たちに向けられたものである。つまり、「賞賛の涙」を表現する「涙落とす」は、人々が光源氏一族に感動して泣く場面に限定して使用されているのである。これは一体何を意味するのであろうか。以下に、多くの人々が光源氏に対してこぞって賞賛の涙を浴びせかける場面を四例ほど引用する。

10（光源氏ノ）かうぶりし給て、御休み所にまかで給て御衣たてまつりかへて、下りて拝したてまつり給ふさまに、みな人涙落とし給ふ。　（①桐壺　二四）

11（光源氏ノ）さるいみじき姿に、菊の色々うつろひ、えならぬをかざして、けふはまたなき手を尽くしたる入り綾のほど、そゞろ寒く、この世の事ともおぼえず。もの見知るまじき下人などの、木のもと、岩隠れ、山の木の葉に埋もれたるさへ、少しものの心知るは涙落としけり。　（①紅葉賀　二四三）

12（光源氏ヲ）見たてまつりをくるとて、このもかのもに、あやしきしはふるひどもも集まりてゐて、涙を落としつゝ見たてまつる。黒き御車のうちにて、藤の御袂にやつれ給へれば、ことに見え給はねど、ほのかなる御ありさまを、世になく思きこゆべかめり。　（①賢木　三六九～三七〇）

13大将の君（光源氏）、御衣ぬぎてかづけ給。例よりはう

ち乱れ給へる御顔のにほひ、似るものなく見ゆ。羅のなをし、単衣を着たまへるに、透き給へる肌つき、ましていみじう見ゆるを、年老いたる博士どもなど、とをく見たてまつりて、涙落としつゝゐたり（①賢木　三八五）

10は元服の儀式における光源氏。その凛々しく美しい姿に人々は感激して「涙を落とす」。

11は紅葉賀における光源氏の青海波の舞姿。その美しさは思わず寒気が感じられるほどで、この世のものとも思われない。少しでも物の趣の分かる者は皆感激して「涙を落とす」。

12は雲林院での勤行を終えて二条院に帰る光源氏。それを見送ろうと身分いやしい者たちもそこらじゅうに集まってくる。世に比べるもののない立派なその姿に皆感動して「涙を落とす」。

13は衣服を脱いだ薄物姿の光源氏。その匂うような顔の色は似る者もないほどに輝き、その透けて見える肌の色は恐ろしいまでに美しく見える。遠くから拝している博士たちも、その美しさに感動して「涙を落とす」。

光源氏のことを「この世の事ともおぼえず」、「世になく思きこゆべかめり」、「似るものなく見ゆ」と異次元の存在であるかのように形容して、人々が集団で感涙にむせんでいる。これらの情景はまるで人々が光源氏を神のように称えながら泣いているかのようである。「涙落とす」には光源氏（そしてその一族）をまさに絶対化する役割が担われているように感じられてならない。

おわりに

以上、光源氏を絶対的な存在として祭り上げる四つの表現（「いつかし」、「～顔」、「かろがろし」、「涙落とす」）について考察してきた。これらの方法は「言葉」を単なる一般的な意味として用いるのではなく、物語として特別な意味を持たせて活用することにあった。一つの「言葉」を物語内の特殊な状況とリンクさせ、それを繰り返すことによって、享受者に同一の印象を刷り込ませ、それを一つの概念として高めていく、という方法であった。

さて、もちろんこれらの言葉以外にも光源氏の絶対性を印象付ける言葉はあるに違いない。大野晋は『日本語はいかにして成立したか』[注16]において、「『源氏物語』までは物語は、女房が声をあげて読み、それを貴族の子弟、女たちが集まって聴くものであった」とした上で、それらの物語とは違って、「『源氏物語』は朗読のための台本などでは決してない」と定義づけて、「『源氏物語』は全く、個々の読み手がその女手による表現を一字一字、一語一語読み分け、味わい分けることを要求している作品である」と論じた。『源氏物語』は書かれた文字が読まれることを意識して成立している物語なのである。それゆえに、口承の物語や朗読される物語とは異なり、話し手の演出や音楽などによる効果は一切期待できない。琵琶法師によって語られる『平家物語』のように、同じ言い回しの文章でも、話し

方、演じ方によって様々に脚色できる文芸とは異なっている。書かれた文字のみによって読み手に状態、状況、心の動きなどを詳細に伝えなくてはいけないのだ。西洋では文学を定義するのに「『想像的』な文字表現」[注17]というフレーズが用いられる。これは文字によって虚構を創造したものという意味であるが、『源氏物語』こそ、その文字に命まで与えて虚構を創造した文学とは言えないだろうか。これら物語内の文字の生き様を今後さらに研究していきたい。

注

1　折口信夫「反省の文学源氏物語」『折口信夫全集　第八巻』（中央公論社　一九六六年）

2　折口信夫「伝統・小説・愛情」『折口信夫全集　第八巻』（中央公論社　一九六六年）

3　高崎正秀「源氏物語における伝承面の問題試論」『高崎正秀著作集第六（源氏物語論）』（桜楓社　一九七一年）

4　高崎正秀「源氏物語を如何に読むか」『国学院雑誌』（一九五八年九月号）において、すでに「神の子」論の先駆が成されている。

5　注3の論文に空蟬の記述はないが、注4の論文において、「空蟬も朧月夜もその人生行路をあやまつ。しかも源氏は反省の色がない」と記述されている。

6　高崎正秀「源氏物語を如何に読むか」『国学院雑誌』（一九五八年九月号）

7　高崎正秀「「禊」文学の展開」『高崎正秀著作集・第六（源氏物語論）』（桜楓社　一九七一年）

8　注4の論文と同じ。

9　宮島達夫『古典対照語い表』（笠間書院　一九九二年）

10　『古典対照語い表』、池田亀鑑『源氏物語大成（第七冊～十一冊）』（中央公論社　一九八五年）以外には以下の索引本を参考にした。

『古事記総索引（索引編・本文編）』（平凡社　一九七四年）

『大和物語語彙索引・塚原鉄雄、曾田文雄編』（笠間書院　一九七〇年）

『平中物語総索引・曾田文雄編』（初音書房　一九六八年）

『うつほ物語の総合研究・室城秀之ほか編（索引編・本文編）』（勉誠出版　一九九九年）

『落窪物語総索引・松尾聡、江口正弘編』（明治書院　一九六七年）

11　畳語には、「いとど」「うらら」のような重複形と、「いといと」「うらうら」のような反覆形とがあるが、ここでは反覆形のみを対象にした。

12　渡辺仁作は『源氏物語』における「いつかし」の校異を分析して、人間の美に関しては、「いつかし→いつくし（はづかし）→うつくし（はづかし）という方向に揺れ動く傾向が認められると論じている。「源氏物語語彙覚

書（五）」『解釈』（第十七巻十号）（解釈学会　一九七一年十月）

13　高崎正秀は「神々の物語の伝承」『折口信夫への招待』（南雲堂桜楓社　一九六四年）において「要するにそこらにある自然――森羅万象は、昔の人にとってはすべて精霊でございます。精霊が巌石になったり樹木になったりして、そういう姿で人間にふれる訣です」と述べている。

14　一つは『うつほ物語』「巣立つことまだ知らざりし雛鳥の枝はいづれぞ知らず顔にも」（小学館『新編日本古典文学全集』国譲中二三四頁）これは、あて宮に失恋して山に籠った実忠が、妻のもとに戻って来たとき、叔父の正頼がお祝いに来た、その正頼に実忠の妻が詠んだ歌で、「雛鳥が未熟でどの枝にとまるのか分からないように、正頼さまも実忠が山籠りした理由が分からないのですね」と皮肉っぽく単に比喩として用いた表現。

今一つは『枕草子』「郭公は、なほさらに言ふべき方なし。いつしかしたり顔にも聞こえたるに」（小学館『新編日本古典文学全集』第三九段「鳥は」九七頁）これは、ホトトギスの鳴き声は得意そうに聞こえる、という作者の感想。

15　小学館『新編日本古典文学全集』一二一頁

16　大野晋「第十二章　女手の世界」『日本語はいかにして成立したか』（中央公論新社　二〇〇二年）

17　T・イーグルトン『文学とは何か』（大橋洋一訳）（岩波書店　一九九七年）の序章